字のない葉書(1)

向田 邦子

(終戦の年の四月、空襲を避けるため、筆者の小学校一年の末の妹は一人で甲府に学童疎開をすることになりました。)

妹の出発が決まると、暗幕を垂らした暗い電灯の下で、母は当時貴重品になっていたキャラコで肌着を縫って名札を付け、父はおびただしい葉書にきちょうめんな筆で自分宛ての宛名を書いた。

「元気な日はマルを書いて、毎日一枚ずつポストに入れなさい。」

と言ってきかせた。妹は、まだ字が書けなかった。

宛名だけ書かれたかさ高な葉書の束をリュックサックに入れ、雑炊用のどんぶりを抱えて、妹は遠足にでも行くようにはしゃいで出かけていった。

一週間ほどで、初めての葉書が着いた。紙いっぱいはみ出すほどの、威勢のいい赤鉛筆の大マルである。付き添っていった人の話では、地元婦人会が赤飯やぼた餅を振る舞って歓迎してくださったとかで、かぼちゃの茎まで食べていた東京に比べれば大マルにちがいなかった。

ところが、次の日からマルは急激に小さくなっていった。情けない黒鉛筆の小マルは、ついにバツに変わった。その頃、少し離れた所に疎開していた上の妹が、下の妹に会いに行った。

下の妹は、校舎の壁に寄り掛かって梅干しの種をしゃぶっていたが、姉の姿を見ると、種をぺっと吐き出して泣いたそうな。

まもなくバツの葉書も来なくなった。三月目に母が迎えに行ったとき、百日ぜきをわずらっていた妹は、しらみだらけの頭で三畳の布団部屋に寝かされていたという。

妹が帰ってくる日、私と弟は家庭菜園のかぼちゃを全部収穫した。①小さいのに手をつけると叱る父も、この日は何も言わなかった。私と弟は、ひと抱えもある大物からてのひらに載る※うらなりまで、二十数個のかぼちゃを一列に客間に並べた。これぐらいしか妹を喜ばせる方法がなかったのだ。

夜遅く、出窓で見張っていた弟が、

「帰ってきたよ!」

と叫んだ。茶の間に座っていた父は、はだしで表へ飛び出した。防火用水桶の前で、痩せた妹の肩を抱き、声を上げて泣いた。②私は父が、大人の男が声を立てて泣くのを初めて見た。

あれから三十一年。父はなくなり、妹も当時の父に近い年になった。だが、あの字のない葉書は、誰がどこにしまったのかそれともなくなったのか、私は一度も見ていない。

※うらなり…つるの末のほうになる実。小ぶりで味も落ちる。

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 次の文は、妹の疎開が決まってからの父の行動をまとめたものである。解答欄に当てはまる言葉を本文中からそれぞれ書きぬきなさい。

妹はまだ□□□□□□□□ので、
父は□□□□の宛名を書いたおびただしい葉書を妹に渡し、その日元気であればマルを書き、毎日一枚ずつポストに入れるよう伝えた。

(2) 次の文は、妹から届いた葉書の内容をまとめたものである。解答欄に当てはまる言葉を本文中からそれぞれ書きぬきなさい。

妹が出発してから一週間ほどで届いた初めての葉書には、威勢のいい□□□□□□□が記されていたが、すぐに情けない□□□□□□□になっていき、ついには□□に変わってしまった。

(3) ――線①「小さいのに……何も言わなかった」とあるが、これはなぜだと考えられるか。適当なものを選びなさい。

ア　妹が帰ってくる状況で、「私」や弟を叱るのをためらったから。
イ　妹を待っていて、かぼちゃのことに頭が回らなかったから。
ウ　妹を喜ばせようとする「私」と弟の思いを理解していたから。

〔　　〕

(4) ――線②「私は父が、……初めて見た」という表現から読み取れる筆者の思いとして適当なものを選びなさい。

ア　父の姿に驚くと同時に、父の思いを感じて心を打たれている。
イ　父の涙に困惑し、普段と違う父の様子を不思議に思っている。
ウ　父のような大人が声を立てて泣く姿に違和感を覚えている。

〔　　〕

(5) 筆者が本文を書いている具体的な時点がわかる段落を探し、その最初の三字を答えなさい。

□□□